
妖怪、かく語る。

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪、かく語る。

【Nコード】

N4445N

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

その妖怪は、愚かでした。

とても愚かで、救いがたいほど哀れでした。

その妖怪は、愚かでした。
とても愚かで、救いがたいほど哀れでした。

妖怪が生まれたのは戦国時代。

妖怪は、いつの間にかこの世に生を受けていました。
血で血を洗う戦場で確立した意識に、妖怪は不思議そうに首を傾げ、しばらくしてどうでもいいといった風に笑いました。

妖怪は人の形を模り、見目麗しい青年の姿でこの世に生きることになりました。

自分の居場所というものを持たなかった妖怪は、ふらふら、ふらふら国を放浪し、巡り合う人々を面白おかしくからかいました。

妖怪は巡り巡り合う人間に問いかけます。

「そこのお人、何処ぞへ行くか」

女でも、男でも、老人でも、子供でも。
誰でもいいのです。

見目麗しい妖怪の問いかけに、皆は答えます。

「ちよいとそこまで」

「あなたこそどちらへ？」

「貴殿は誰か」

答え逃げる者。話を合わせる者。誰何する者。

誰も彼もがどこぞか違う。

人間はかくも面白い！

問いに答える者に飽きたらゲラゲラ笑い。

「そこのお人、何処ぞへ行くか」

妖怪は思いました。

人間はなんて面白いのだろう！

見目麗しい妖怪はゲラゲラ笑い、命を食します。

旅人から奪った着物を紅に染め、全てを全て引き千切り嚙下します。

妖怪は、己のことをまこと正しく『妖怪』だと知っていました。

人間ではない妖怪は、人間が大好きでした。

妖怪は歪んだ形で人間を愛していました。

人々が考えた『妖怪』を面白おかしく演じながら、人を惑わし人を己の虜にさせ、またそれができなくても問題ないとばかりに妖怪は笑いました。

人間が大好きな妖怪はある日、道中出会った商人の命を食し、商人が背負っていた重たい木箱を背負い近くの村へと赴きました。

見た目が良い良い妖怪には人が集まります。

人の良い良い笑みを浮かべている妖怪には人が集まります。

妖怪はそれがたまらなく嬉しく楽しいため、己に話しかけてくる人間達に問いかけます。

「商品を見やんかね」

集まる人々は、妖怪の背負う木箱から出てくる品を興味深そうに見ていました。

妖怪も、木箱から出てくる品を興味深そうに見ていました。

品の説明を求められれば「使つてのおたのしみ」と笑い、道行く人がちらりとこちらを見れば笑みを浮かべ「見てらっしゃい、見てらっしゃい」と声をかけ興味を引かせてやりました。

物と交換に渡された金は妖怪にとってどうでもいいものですが、人から渡されたものを無碍にできない妖怪は、その金を人と同じく使うことにしました。

今日の妖怪は武士の姿をしていました。

堂々、刀を腰に携えて暖簾をくぐります。

団子屋と呼ばれる甘味所。

赤いお盆に乗っ付けられ運ばれてきた団子と茶を食しながら、妖怪は思いました。

人間とはなんと美味なるものを作るのか！

ぐにやりと微笑み、妖怪は満足げに団子をも一つ注文しました。

「侍さん、何処ぞから来たんで？」

妖怪は声を辿り、そこに立っていた一人の女を見つけると途端、人間に話しかけられたことによる喜びに無邪気に微笑みました。

女は町娘のように着飾ってはいませんでした。

旅人然とした凜々しい立ち姿。

武士の格好をした己と同じように刀を腰にさしていました。

妖怪は言葉を紡ぎます。

「遠い遠い土地の、戦場いくさばから」

「まあ。遠方のお侍さんがどうして此処へ？」

「人を、見たくて」

「変なことを言うお侍さんだこと」

くすくす笑い、女は団子を食す妖怪の横にへと腰をおろしました。妖怪は別段、女のことを無礼だともなんとも思いません。

勝手に横に座る己を咎めない様子に、女は少々驚いた顔をしたの

ち、綺麗に、それはもうまこと綺麗に笑いました。

「お待さん。何処ぞへ行くか」

妖怪は、己が問いかける問いを己の問いとして己に問いかける女に微笑み問いました。

「貴殿は何処ぞへ行くか」

妖怪と女は瞬間、笑いました。

妖怪はこの時悟りました。分かってしまったのです。横に座る女は確かに人間だったが、己と同じ『妖怪』を己の中に飼っていることを、妖怪は感じ取ってしまったのです。

人間が作り出した『妖怪』を面白おかしく演じる妖怪と、妖怪が演じてみせた『妖怪』を己の中に飼いそれでもなお恐れぬ女。

巡り巡り合うのはなんとも楽しい。

妖怪は笑い、女も笑った。

もう一つ、妖怪は問いかけます。

妖怪は人間が大好きです。

大多数の人間が大好きなのです。ですが、その大多数の中で巡り合う人間に、一番興味を持っています。

なので妖怪は、女に問いかけました。

「共に旅をせんか」

多くは語り合っていない妖怪と人間。

妖怪は面白い人間を手放したくありませんでした。

飽きるまでからかい、飽きたら食べる。

それは綺麗に微笑む女に対しても同じことでしょう。

女は問いに微笑み、答えます。

「なんて素敵なお誘いなんでしょう」

この日、妖怪に旅の道連れというものが初めて出来たのです。

妖怪は驚きました。

それと同時に己が驚くことに驚きました。

二重にも三重にも動く己の感情に振り回されながら、妖怪は道連れの女の行動を頭の中で反復させました。

お待さん、世に轟き遍く妖怪で？

武士の姿ではなく今度は薬師の姿をした妖怪は、それに続き頷きました。

女はバラバラに解体された肉の塊を一瞥し、笑いました。

ああやつぱり。良かったわあ。

妖怪は驚き目を瞬かせました。

女の言葉は予想外のもので、また女の笑みも予想外でした。

怖がると思っていた。逃げると思っていた。逃げるのならば、捕まえようと思っていた。捕まえたならば、飽きるまで悲鳴をあげさせようと思っていた。悲鳴をあげ疲れたのならば、面白おかしくからかおうと思っていた。

頭の中で立てられていた計画とも言わない遊びの羅列が、音も立てず壊されました。

妖怪は首を傾げ、しばらくして嬉しいと笑いました。

己を受け入れてくれる人間がここにいることに、妖怪は素直に喜び、女を抱きしめます。

妖怪は己の気持ちに気付いていませんでしたが、この時確かに妖怪は恋に落ちました。

嬉しいを身体全体で表す妖怪。

抱きしめられた女は綺麗に微笑み、くすぐりたい、お待さん、と小さく呟きました。

妖怪は人間ではありません。また、妖怪は己以外の妖怪を見たことがありません。

そして妖怪は見目麗しい青年である外見とは裏腹に、子供でした。だからでしょうか。

妖怪は妖怪に恋することなく人間に恋をしました。

初めて味わう感情に、妖怪は生涯気付くことはありません。

人間である女も、感情の名を教えることはしません。

子供の頃憧れ焦がれた『妖怪』を演じる妖怪を、ただあるがままに己を愛す妖怪を、己と同じ感情を持つてくれた妖怪を、女はただあるがままに受け入れました。

妖怪は命を屠ります。

まこと面白き人間達。

その横で女はただ受け入れます。

時に己に襲い掛かる厄災を、己の腰にさした刀で振り払いながら。

妖怪は血を浴びることなくその場に佇む女の手を引きます。

女はひっそりと頬を染めその手に引かれ、傍に寄り添います。

妖怪と人間は、この時確かに幸せでした。

妖怪はその幸せをケラケラ笑い手放すまいと手を握りました。

人間は強くなったそれに可愛らしいと笑い握り返しました。

妖怪と人間は、この時確かに幸せでした。

その妖怪は、愚かでした。
とても愚かで、救いがたいほど哀れでした。

妖怪である青年は人間と恋に落ちました。
妖怪である己が演じる『妖怪』を、少しずつ捨て去っていきまし
た。

人間である女は妖怪と恋に落ちました。
人間である己が内側に飼う『妖怪』を、少しずつ忘れ去っていき
ました。

その人間は、愚かでした。
とても愚かで、悲しいほどに哀れでした。

それと同時に、二人はとても幸せでした。

妖怪は問いかけます。

「何処ぞへ行こうか」

女は答えます。

「あなたと共になら、何処へでも」

妖怪は、ずっとずっと己が欲しかった言葉を紡ぎ出す心を、心底

愛しました。

人間は、ずっとずっと誰かに言いたかった言葉を愛してくれる心を、心底愛しました。

その二人は、愚かでした。

とても愚かで、救いがたいほど幸せでした。

（後書き）

語り語る物語調に、恋愛物。

妖怪を捨てた妖怪と、憧れた『妖怪』を忘れていく人間。
そんな感じ。

ここで補足。

『妖怪』は世間一般で知られる問いかけ妖怪のこと。

妖怪は戦場で生まれた見目麗しい青年のこと。

ややこしいんだ、ぜ！

冒頭とかで『哀れ、愚か』と書いているのは、妖怪が『妖怪』を捨てていくことに対してです。

女に向けての『哀れ、愚か』は『妖怪』に恋をしていた女が、『妖怪』ではなく妖怪を愛していたことに対するものです。

最初は女の人死に予定だったけども、壊しがたくて無理でした。
ここまで読んでくださった方々、感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4445n/>

妖怪、かく語る。

2010年10月9日15時39分発行